

# Travel and Tourism Research Association (TTRA) 年次国際会議参加報告

公益財団法人日本交通公社 観光研究情報室 研究員 外山 昌樹

二〇一四年六月十八〜二十日にかけて、ベルギーのブルージュにおいて Travel and Tourism Research Association の第四十五回年次国際会議 (Annual International Conference) が開催され、当財団からは筆者を含む三人が参加した。

本稿では、会議への参加報告を行うとともに、そこから見えてきたツーリズム分野の研究動向についても紹介していきたい。

## Travel and Tourism Research Association (TTRA) について

Travel and Tourism Research Association (以下、TTRA) は、一九七〇年に設立されたツーリズム分野における研究者と実務家によって構成される国際的な学会組織である。

ツーリズム分野における代表的な教科書として知られて『Tourism: Principles, Practices, Philosophies』の第12版 (Goeldner & Ritchie, 2011)

においても、TTRA はツーリズム分野を対象とした世界最大の学会組織であり、観光産業従事者、研究者、学生、政府関係者、メディア、コンサルティング会社といった多様な関係者がメンバーであると紹介されている。TTRA 本部はアメリカに所在し、北米地域が活動の中心になっている。しかしながら、ヨーロッパやアジア太平洋地域にも支部があり、活動範囲は世界規模であるといつてよいだろう。

TTRA の代表的な活動としては、学術誌 [Journal of Travel Research] の発行をはじめ、これから紹介する年次国際会議などの各種研究集会の開催が挙げられる。なお、「Journal of Travel Research」は当財団の「旅の図書館」でも電子ジャーナル形式で購読しており、閲覧することができ。

## 年次国際会議の 開催概要

年次国際会議は、毎年六月に開催される。先に述べたとおり、北米地

域を中心に活動している学会であることから、開催地はアメリカまたはカナダの都市であることが多い。本年のようにヨーロッパで開催されるのは、数年に一度ペースとなっている。例年、会議開催の約一年〜九カ月前には、口頭発表・ポスター発表の論文要旨 (アブストラクト) の募集が行われる。会議のテーマが設定されるが、必ずしも発表内容とテーマとの関連性が強くなくても構わないようである。ちなみに、本年のテーマは「Tourism and the New Global Economy (ツーリズムと新たな世界経済)」であった。

提出されたアブストラクトに対しては査読が行われ、査読通過者には会議での発表が認められる。査読期間は、本年の場合、二カ月程度であった (一月初旬に募集が締め切られ、三月上旬に査読通過の通知があった)。ブルージュ市内のホテル (Martin's Brugge Hotel) を主要な会場として、全三日間の会議開催中に基調講演、口頭発表・ポスター発表、学生による研究発表 (Student Colloquium)、先進的な研究課題に関するワークシ



写真1 ブルージュの街並み

ヨップ、ランチミーティング、パーティー形式の開会・閉会セレモニーなどが行われた。日本国内の学会と同様、同じ時間帯で複数のセッションが同時並行で進行している形式であった。中世の面影を残す歴史的観光地であるブルージュ（写真1）で開催

されたこともあり、開会セレモニーや一部のセッションは、歴史的建造物である市庁舎やベルフォルト（鐘楼）といった場所が会場となっていた。まさに、地域の特徴と雰囲気を感じられる空間であるユニークベニューを活用して、ブルージュならではの

はのおもてなしで会議参加者を迎えたといっただろう。

## 研究発表の傾向

口頭発表の数は、全部で七十二本（セッションの数は十九）であった。一つのセッションの時間は九十分であり、時間内に三〜四本の発表が行われた。セッションのテーマは多様であり、「Destination Imaging」や「Destination Choice」といったマーケティング系のものであれば、「Local Sustainability」や「Thinking Sustainability」といったような持続可能性に着目し

たテーマや「Heritage」や「Mountains, Coasts, and Islands」のような特定の観光資源や地域タイプに関する研究を集めたセッションもあった。

加えて、本年は「International Tourism and Media (ITAM)」という名称のセッションが別立てで行われており、ITAM枠での発表数は二十本（セッションの数は五）であった。

ITAMでは、その名の通り映画、テレビ、写真、ゲームといったあらゆるメディアを対象に、観光との関係について検討した研究発表が行われた。近年、日本でもコンテンツ・ツーリズムという研究領域が生まれるなど、メディアと観光との関係について注目が集まっている。同様の動きが、世界的に見られているといえるのかもしれない。

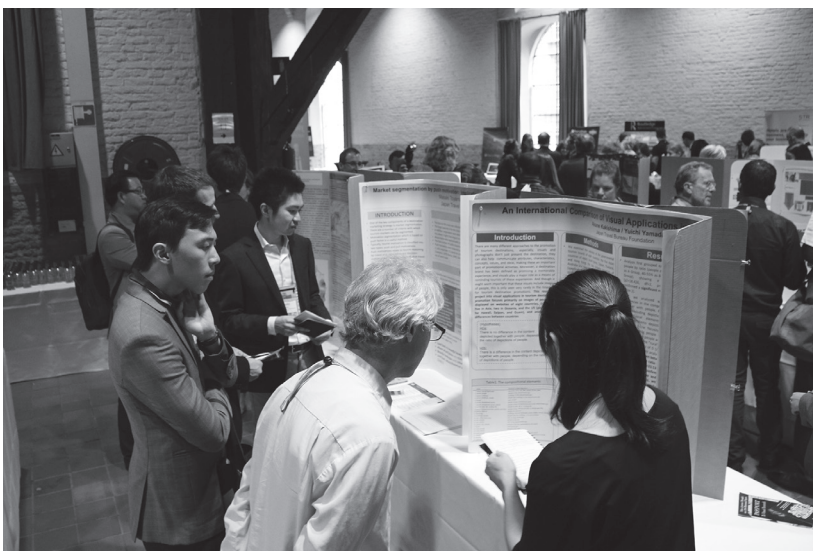


写真2 ポスター発表の様子

れない。ポスター発表数は、全部で三十九本であった。口頭発表と同じく、多様なテーマでの発表が行われており、改めてツーリズム研究が学際的な研究分野であることを認識できた（写真2）。学会運営の参考になると思ったこ

とだが、ポスター発表の場では、聴衆に対してできるだけ多くの発表を聞いて回るように促す。仕掛けが用意されていた。まず、聴衆に対して、発表タイトルの一覧が掲載された「パスポート」というシートが配られ、一つの発表を聞くごとに発表者からシールを貼ってもらえる。シールを規定の人数以上から集めれば、次年度の会議に無料で参加できるチャンスを得られるような仕組みとなっていたのである。

今回、筆者はポスター発表を行ったのだが、この仕組みの相乗効果で、九十分の持ち時間中、比較的途切れることなく多くの人と意見交換することができた。

日本からの発表数は、口頭発表(ITAM枠を含む)とポスター発表を合わせて、全部で六本であった(表1)。当財団からは、筆者が「旅行動機を整理軸とした市場セグメンテーションに関する研究」について、柿島あかね研究員が「観光地プロモーションにおけるビジュアルイメージの活用に関する研究」についてポスター発表を行った。

表1 日本からの発表リスト

種別	著者(敬称略)	タイトル
口頭	国枝 よしみ(大阪成蹊短期大学) Louis Brigand (Université de Bretagne Occidentale) Cécile Guégan (Université de Bretagne Occidentale)	Perceptions of sustainable tourism in Mont-Saint-Michel: Japanese tourist attitudes after introduction of the new transportation system
口頭	Tom Jones (明治大学) 林 宇一(明治大学) 山本 清龍(岩手大学)	Investigating comparative opinions of Fujisan's outstanding universal value: Empirical evidence from Japanese and foreign climbers
口頭(ITAM)	Sue Beeton (La Trobe University) 山村 高淑(北海道大学) Philip Seaton (北海道大学)	Japanese Contents Tourism and Its Players: From Film-induced Tourism to Contents Tourism
口頭(ITAM)	Philip Seaton (北海道大学)	Contents Tourism and the (Hi) story of "The Last Samurai"
ポスター	柿島 あかね(公益財団法人日本交通公社) 山田 雄一(公益財団法人日本交通公社)	An International Comparison of Visual Applications in Tourism Promotion
ポスター	外山 昌樹(公益財団法人日本交通公社) 山田 雄一(公益財団法人日本交通公社)	Market segmentation by push motivation: Implications for regional destination marketing

## ヨーロッパの ツーリズム研究に 触れて

本年は、開催地がベルギーであったことから、過去に参加した年次国際会議に比べて、ヨーロッパの研究者からの発表が多かったように感じた。あるセッションでは、スコットランドのイギリスからの分離独立とツーリズムの関係についての発表が行われていた。この一例に見られるように、会議全体を通じて、ヨーロッパ独自の風土や問題意識に基づいた研究が各所で展開されている印象を受けた。

来年二〇一五年の年次国際会議は、アメリカのポートランド(オレゴン州)で開催予定となっている。日本ならではの研究であると評価されるような発表ができるよう、今後も研究成果を海外でも発信し続けていきたい。  
(とよま まさあき)

### 【参考文献】

Goeldner, C. R., & Ritchie, J. B. (2011). *Tourism: Principles, Practices, Philosophies* (12th Edition). John Wiley & Sons.